

027
281
1

梅
さ
く
時

全



愛知

愛知
女子
學校
圖書



029
281
1

愛知女子
第 11724 號
圖書

2115

ことごとく其のくく免かりあつては、
何れも人の定むる所なく、
昔々ぬ蕃子かゝる所、
トト家子市中とけく、
と只きを乍ら、
潮汐乃盛塵、
すんとはなむ、
層階の山く、
内へ庭を、

一極か、
日影のうつり、
ま乃坐と、
とれより汗、
うらちの、
あつ乃、
隋の、
ふた、

林こゝや壁のかは、

ふういんはたかたし隣のおりも入る
 むめ候や寝庵の坐も憂也 鳥来
 こけを帯の作し ことごとく 未だ文は未だ
 師及連中と付事り 一斗を懐正解
 諺うまふしを向より集らみたり
 日記はゆき書し 付候る

今度月序

三月三日

歎仙

歌 此日や耳を床ころふ唐の衣 壁枝
 梅子桃より曲家と聲穴 冬海
 長を短とほろよりち佳く 院花
 玉より按摩お研つた之れ 桑林
 丸をよこしはの月と星あは 完山
 紙つゝ草まき持の若到 畔幸

任——晴上氣北葉卷賣
光

面と研り——山河——幾人
山

斤削と毒く言く——田植く——
戸

之々之々初當をき月境く——
鳥

長崎と津と原と橋く——屋瓦
才

吳々州と此の二竹七葉
源

春月と百多掛く——照之一——
子

庭北層々葉層々く行路
曉

不知れこく道く——踊りこく
李

醉きく——酒く——免書案
木

山河と常盤と玄と川河跡く
画

市亭とまけと産物く——春日
下

大工と——網く——宮く——花のく——
末

摺りく——く——地乃——吹流く——
口

春之部

そりれ暮家一燈く初春の夜 冷花

えりて春の海へ作る花雪の景 長葛

白酒の廊の足の中を花 篤子

あふまれば人や梅乃るかど 際春

きのあはれみくればは千羽 梢下

菜の花や雨をまよもよもまよ 傾半

路とく春をよそへやけり 冬海

うさひ馬や春よ賦を傳はに 橋下

松杉一碑を吹きたる 雲戸

春のしるしに人散り花の山 林才

枝のうらみわくをきれ 柳 吏右

石明とくしる梅の中 杜末

山嶺乃春よまよもよもまよ 菜穂

ちうをよや春の舟より 翠潮

梅さくちやふりりの春をよそへ 花末

下^レ髪の下^レ巾着は^レ淺草^女 草花
 信任船は^レ後折あり 梨の花、喜波
 かけらふ^レ子^レ香の園も有 麦飯、山^レ露
 子の母は^レま^レま^レけ^レる^レ産^レる^レを^レた^レか^レ 井水
 袖あ^レく^レ笑ふ^レ摩訶の^レ捨^レう^レ那^レ、才^レ路
 子^レ神^レ子^レ帆の^レ伊^レと^レ有^レけ^レる^レ、千^レ結
 中^レ老^レま^レい^レま^レく^レと^レ織^レや^レく^レと^レき^レる^レ、招^レ口
 人^レ走^レる^レぬ^レ園の^レか^レみ^レ中^レ掃^レ月、柳^レ巻

ゆ^レく^レま^レく^レと^レき^レる^レ遊^レ人^レ春^レ柳、望^レ定
 舟^レと^レ橋^レと^レ遊^レば^レて^レも^レ或^レこ^レと^レよ^レか^レ 林^レ舎
 何^レノ^レの^レ花^レと^レる^レあ^レや^レ橋^レの^レ虫^レ 秋^レ花
 遊^レん^レと^レ遊^レ一^レ相^レ着^レの^レ遊^レう^レ那^レ 完^レ山
 口^レの^レ庭^レふ^レふ^レみ^レ遊^レふ^レふ^レり^レむ^レの^レ言^レ 童^レ枝
 岸^レも^レ代^レ乃^レり^レと^レ遊^レう^レ童^レ 童^レ徑
 雲^レ子^レ研^レ流^レい^レ遊^レく^レ遊^レ子^レの^レあ^レり^レ 芦^レ帆
 う^レら^レひ^レと^レ乃^レあ^レま^レや^レ侍^レ子^レと^レ守^レ藤^レ入^レ 素^レ木

夏之部

心海屋之堂了ぬ光也五月雨 栞下

白雲巾の吹流田植の笠自傳 風堂

明三ふふ地は草中 池乃蓮 栞画

牛欄の代ちありて涼之柳 監舎

栞杖も栞桑乃河に若くぬ 浦口

河蘭を亞通も花河に流す 赤木

桑一枚糸まよ河に草一尺ふ 渡花

高の苦命何をも忘れさる所が 翠枝

千の桑も法乃草布 佛も言 中涼

雲風乃あふの舞やかんこ言 杜光

隋子田と斬しつるは草を那 草治

淋すえもく北月を法く 牡丹う南 里曉

言よ千里をくはれく保もまに 吾仁

夏野ゆいつれの扇を披けりぬ 仲舎

筆一とくは立草もあふ草の末 完山

何處更枝母の花乃あつて那 サ 珍上

志はのぬ折いそほをわふ外、林香

中よまやま若と隙の露く左に、文志

むよひめれ月よふけ中、文志、珍子

く赤叶を去り上る桔槔、糸園

新寒の望有るくなく赤木、社村

夕まゝ善おとそあり澆山、新江

光燭乃常もそく川内極笠、銀月

蝶と好と扇をほふ星う那 畔堂

け清く起る行くまを蓮んか 飛来

蝶とくや揚むくそく綿の志 冬抄

二季混雜

替ぬも振ふ能れ電う那 東斗 至芽

去る梅や舞のく揚る月初も 鬼坂

心ぬけくも山くうんこ 桂洲

蝶のまゝくくそり春よの夜 方得

傘持てての葉梅の吹く影 光樹
 遠く月や木の葉の夕日照る 童牛
 雲をまけて賦く 葉紅山 翠堂
 影を此の風ととくや 文衣 杉雲
 白壁を昔の月影を子規 如林
 鳴るうやをれり其もや水室 柳舟
 帷をくらする杉乃多や竹を 井涼
 湯を川と梅とあし 藤中在 紫秋

風を吹く月をさゆへりけ桶 巨洞
 落柿中初為ハ海と浪く在哉 け谷
 岩に汁を流すとくり小籠か 片石
 雲は種も葉をて詩中杉岸 瓢葉
 浮きくの喚くまはるや梅の影 岫雪
 裸身此二玉も累し 階はあり 花名
 雲はを免く際と床もや糸の影 朱唇
 月夜をく清くしてはけの葉を影 三糸

山鹿の鶴精とあるは櫻うね
唐子ととくは魚の燕下
種山
雪くゆく牛も天鶴もや瓶乃面
山悪

軸

ゆきくろく

和巾あり
かきしり

柳屋

正字丁卯年

淡中酒堂前 辻五板

